キリスト教講演会**「桃山学院と聖公会」**

講師 西原 廉太氏（日本聖公会中部教区主教、立教大学総長）

（動画配信）2022.7.12～ 2023.3.31　YouTube 配信　主催：学校法人桃山学院

はじめに

小餅谷（こもちや） 哲男（てつお） 桃山学院教育大学　キリスト教センター長

桃山学院キリスト教講演会をご視聴いただきありがとうございます。この講演会は本学院のルーツであるキリスト教を学ぶことを目的として実施しております。今年度は立教大学総長、また、日本聖公会中部教区主教の西原廉太先生を桃山学院教育大学のエレノアホールにお招きして、「桃山学院と聖公会」というテーマでお話しをいただきます。

開会にあたり、桃山学院学院長の磯晴久より開会のご挨拶を申し上げます。

開会の挨拶

磯（いそ）　晴久（はるひさ） 桃山学院学院長

皆さま、本日は桃山学院主催のキリスト教講演会に、ようこそお越しくださいました。

大変ご多忙な中、ご講演を引き受けてくださいました、西原廉太先生のご紹介をさせていただきます。

西原廉太先生は京都大学の工学部をご卒業後、色々なお出会いがあって、キリスト教の世界に入られました。そして現在は、本学院とは兄弟姉妹校であります立教大学の総長をなさっておりますと同時に、日本聖公会の中部教区の主教でもあられます。その他キリスト教学校教育同盟の理事長、世界の聖公会大学連合の理事、また、WCC 世界教会協議会の代表理事をなさっておられます。その他お引き受けになっているものは数えきれない程で、まさにマルチプレーヤーというふうに私は思っております。

ご専攻はアングリカニズム、エキュメニズム、組織神学、現代神学でありますが、特に、時空を超え、空間を超える聖公会のアングリカン神学のダイナミズムを研究されております。著書に「聖公会が大切にしているもの」があります。実はわたくしが聖公会についてお話しする時にはその本が種本でありまして、そこからいっぱい情報をいただいてお話をさせていただいております。

今日は「桃山学院と聖公会」というテーマでお話をしてくださいます。桃山学院は英国の宣教団体であります CMS の C.F.ワレン宣教師によって大阪の川口居留地に作られ、今年で 138 年です。また、桃山学院教育大学の前身、プール学院はその 5 年前にやはり聖公会の流れをくむ学校として誕生しております。ですから、今日は私達桃山学院の建学の精神、ルーツ、あるいはこれから何を大切にして歩んだらいいか、そうした事についてお話をしてくださると期待しています。

先生のお話をいっぱい聞きたいと思いますので、ご紹介はこれまでとさせていただきます。西原廉太先生、どうぞよろしくお願いをいたします。

「桃山学院と聖公会」

講師　立教大学総長
西原 廉太　氏

みなさんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、立教大学総長の西原廉太と申します。本日は桃山学院さんにお招きいただきまして、お話をする機会を与えられましたことを心から感謝申し上げます。私は桃山学院大学、そして、こちらの桃山学院教育大学、共通のルーツであるプール学院、また、桃山学院中学校高等学校などそれぞれの校舎を何度も訪問させていただいておりまして、大変親しみを感じております。また、立教大学、立教学院とも言いますけれども、立教学院と桃山学院は今からお話しますように、姉妹関係にありますので、それも含めて私をこの場に立たせていただきましたことを心から感謝申し上げます。

本日は、皆さんの桃山学院、私の属しております立教大学、同じルーツを持っております聖公会という教会ですが、その聖公会と桃山学院の関係について、お話をさせていただければと思っています。

みなさんの桃山学院は、先ほど磯学院長からお話がありましたように、英国聖公会の CMS（教会宣教協会）という宣教団体の宣教師として来日された、チャールズ・フレデリック・ワレン司祭が 1884 年に大阪の川口外国人居留地（現在の大阪市西区）の中に、聖三一教会を作り、その一室に小さな男子校と神学校を開いたことに遡ると承っています。この聖公会という教会についてお話することで、桃山学院の皆さんの建学の精神の根源について、少しでも理解を深めていただくことが出来れば幸いです。

聖公会ゆかりの人々

いまご覧いただいている写真の主は誰でしょうか。お解りになるでしょうか。一度はご覧になったことがあるかと思います。この方は黒船で有名なペリー提督です。マシュー・カルブレイス・ペリーというのが本名ですが、ペリー家はもともと聖公会の家系で、彼もアメリカ聖公会の熱心な信徒でした。ペリーはアメリカに戻ってから南北戦争などにも従軍して活躍します。しかしアルコールが原因で肝硬変を患って少し寂しい晩年を過ごすことになり、1858 年に 64 歳で亡くなりました。そしてペリーはニューヨークにあります聖公会の教会の墓地に葬られています。そういうことでペリー提督は聖公会の人であったということです。

では、この写真の人物はどなたでしょうか。この人は初代駐日公使、いわば大使です。アメリカの初代駐日大使となりましたタウンゼント・ハリスです。ハリスは日米修好通商条約を締結したことでよく知られておりますが、彼も熱心な聖公会の信徒でした。ペリー提督よりもはるかに熱心であっ

たといわれています。そしてハリスは日本に滞在しております間、いわば、聖公会の信徒宣教師のようなかたちで、さまざまな伝道活動も行っていました。おそらくこのことについてはなかなか日本の歴史教科書には載っていないことだと思います。

最初の礼拝

ペリーについて、もう一つエピソードをご紹介いたします。彼はご存じのように、2回日本に黒船で来航していまして、2回目は1854年3月6日です。ミシシッピー号で来航しました。その船にはロバート・ウィリアムズという若い陸戦隊員、今の海兵隊員がおり、彼が船のマストから落ちてしまい、それが原因で亡くなります。当時の航海記録によりますと、彼の葬儀が、3日後の1854年3月9日に行われたと記載されています。その葬儀、葬送式がどのように行われたかという事について興味深い記録が残っています。葬儀は、アメリカ聖公会のペリー艦隊のチャプレンであった、ジョージ・ジョーンズという司祭によって横浜の山手で執行されたとあります。

チャプレンというのは大学や病院や施設で働かれる牧師のことで、桃山学院の各校にも聖公会のチャプレンの先生方がおられますけれども、そのチャプレンが葬送式を行ったとあります。その時に用いられた式文は、当然ながらアメリカ聖公会の祈祷書で行われました。ですから、日本で最初に聖公会の式文を用いて礼拝が行われたのは、ペリー艦隊の隊員のお葬式であったという事になります。

日本とキリスト教の繋がり、これはカトリックが古いわけですが、16世紀にフランシスコ・ザビエルをはじめとして、カトリックの宣教師たちが日本にやってきて以来です。しかし2世紀以上の間、日本はキリスト教を禁じるようになりました。そういう中で、横浜で行われましたロバート・ウィリアムズ隊員のアメリカ聖公会の式文による葬送式は、いわば日本における聖公会も含めたプロテスタントのキリスト教の葬儀としては、非常に歴史的な事柄であったと言えると思います。

このジョーンズ司祭が行ったウィリアムズの葬送式の場面が、航海日記に記録されております。横浜の増徳院というお寺の境内を借りて、聖公会の葬送式が行われたのですが、そのお寺の高僧がウィリアムズ隊員のキリスト教の葬儀が行われる横で、ずっと仏教のお経を唱えてウィリアムズ隊員の死を悼んでいたと記録には書かれています。さらに、葬送式が終わりペリー艦隊の隊員が隊列を組んで船に戻った後も、ずっとそのお坊さんはウィリアムズのために祈っていたと航海日誌には書かれています。この日誌を書いた記録者は、日本の宗教は素晴らしく、大変感銘を受けたと記しています。そういうような出来事もあり、日本における聖公会の歴史は非常に古く、それが皆さんの桃山学院のまさにルーツとつながっている、そのことをまず冒頭でお話をさせていただきました。

最初の宣教師

本格的に聖公会による宣教が日本で行われるのは、やはりアメリカ聖公会の宣教師によるもので、今ご覧いただいているチャニング・ウィリアムズ宣教師が1859年に上海から長崎に上陸をしました。これが正式な日本における聖公会の出発となります。また先程申し上げた通り、当時キリスト

教は禁教扱いでしたので、ウィリアムズは長崎の、今お見せしている崇福寺に居住しながらずっと日本における伝道の機会をうかがっていました。その期間はおよそ7年に及びます。

7年の間、彼はほぼ軟禁状態でしたが、お寺にこもってひたすら中国語の祈祷書を日本語に訳したり、聖書の日本語訳を作ったり、様々なお祈りを日本語に直したりしながら生活を送っていました。当時の幕末の志士たちが崇福寺に滞在するウィリアムズを訪れて、様々な教えを乞うていたという記録があります。高杉晋作や前島密などがウィリアムズを訪れていたという記録もあります。彼はまったく見通しがない中、7年の軟禁生活を過ごしました。

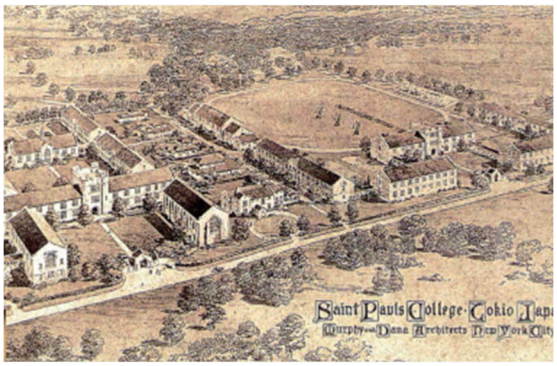
途中崇福寺を離れて、宣教師館を建てることを認められるようになり、

お見せしているのが、ウィリアムズの宣教師館跡の石碑です。今、長崎の活水学院の壁に刻まれています。7年間ずっと長崎に缶詰めになっていたのです。皆さん、7年もの間我慢できるでしょうか。考えていただいたらと思います。私のようなせっかちな人間は、7年間もじっとそこに留まっていることはできないなと思います。もしウィリアムズがもっと短気で我慢できない人であったら、今日の聖公会の基礎は築かれなかったのではないかと思います。

そして1873年になり、ようやく日本におけるキリスト教の禁教が解けましたので、ウィリアムズは日本における宣教を開始することが出来ました。アメリカ聖公会だけではなくて1873年には、英国の聖公会から宣教師たちがやってまいりました。皆様の創始者ワレン先生も英国の聖公会からの宣教師です。そういうわけで、アメリカ、イギリス両方から日本に聖公会の宣教師がやって来るようになりました。

このウィリアムズ主教は1873年に長崎を離れて、途中、大阪の、現在川口基督教会のある所での宣教を経まして、さらに東に移動して、まだ江戸といっていましたけれど、1873年に東京にたどり着きます。1874年に築地、皆さんご存じでしょうか。その築地に私が属しております立教学校を作りました。今の立教大学の前身です。私の働いております立教大学は1918年に築地から池袋に移転して、今お見せしている写真は築地時代の立教ですが、今ここには聖路加国際大学、聖路加国際病院が建っています。いわば聖公会エリアなわけです。築地には、様々な、立教学

院発祥の碑ですとか、その他、プロテスタントの諸学校のルーツをたどれる様々な記念碑がありますので、もし東京に来られる機会がありましたら、是非めぐっていただければと思います。
これが 1918 年に池袋に移転する際の立教の設計図です。そして先程お話しましたように、1884 年にはワレン司祭によって皆様の桃山学院の基礎が据えられました。



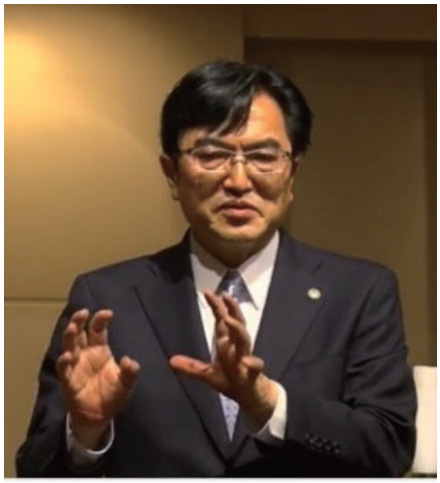
聖公会という教会

それでは、次に皆さんのルーツである聖公会という教会がどういう教会か、何を大事にしているのかをお話しをしたいと思います。

聖公会という教会は、よく「中道」の教会という風にいわれます。中間とか、中庸とか。ローマ・カトリック教会とプロテスタントの教会の真ん中、間という意味でよく言われるわけです。カトリック的なものも聖公会は残しておりますし、ローマに対抗したという意味ではプロテスタントのくくりにも入ります。聖公会の特徴はむしろカトリック教会、その中でも最も古い修道会といわれるベネディクト修道会の伝統にあります。

そしてもうひとつ、英国がルーツのケルト宗教があります。古代の英国にはケルト宗教というものが土着の宗教文化として根付いていました。

古代ローマ帝国時代、ローマ帝国がまだキリスト教を公認していない時代に、キリスト教は弾圧されていました。ですので、クリスチャンたちは弾圧を逃れてどんどん帝国の外側に逃げ、亡命するわけです。当時のローマ帝国というのは、とても強大で、広大な範囲で、北限はいまのスコットランド辺りだったと言われています。ですから、弾圧を逃れたクリスチャンたちは、その北限のスコットランドのさらに北の辺りまで逃れたようです。2 世紀 3 世記ごろの英国の遺跡調査などで、そのころすでにローマ型のキリスト教が伝えられていたという痕跡が出ています。そしてもともとそこに土着していたケルト宗教と、亡命者がもたらしたカトリックのキリスト教が融合するという出来事が起こります。シンクレティズムといいますが、シンクロするというようなことが起こりまして、そういう中で生まれたキリスト教が「ケルトキリスト教」で、ここに独自のキリスト教文化が英国の地に誕生します。

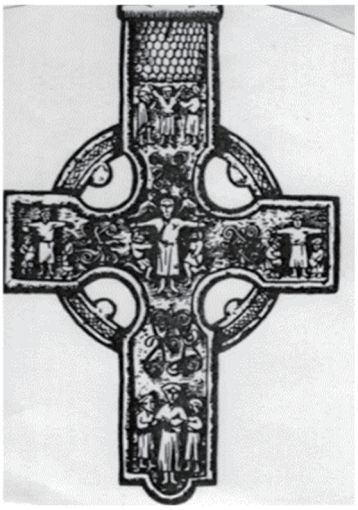


ケルトキリスト教、Celtic Christianity と英語では言いますので少し時間がありましたら、インターネットで検索していただけますと、様々出てきます。いろんな情報が出てきますのでチェックしてみてください。という事で、聖公会の一つのルーツとしては、ケルトの伝統があるわけです。もう一つはベネディクト修道会の伝統、この二つが交じり合っているのが聖公会の特徴

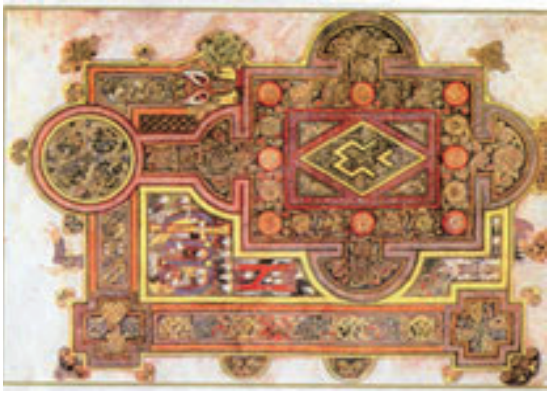
です。
ベネディクト修道会の伝統につきましては、後程さらにお話いたします。最初に、すでにそこにあったケルトの宗教文化と伝わってきたキリスト教が融合したケルトキリスト教というものについて、すこしお話をしておきたいと思います。
こういう形で土着する例が日本にもあります。例えば、江戸幕府がキリスト教を禁じておりましたが、その中で、16 世紀にローマからカトリックの宣教師たちが伝えたキリスト教を守っていた日本のクリスチャンたちは、潜伏したり、隠れたりする。それが隠れキリシタンとか潜伏キリシタンといわれる形で長崎などに残っており、皆さまが長崎に行かれた折に、様々な触れる機会があると思いますが、いわゆる隠れキリシタンと言われます。そういったようなケースが、英国にもあったという事です。

ケルトキリスト教

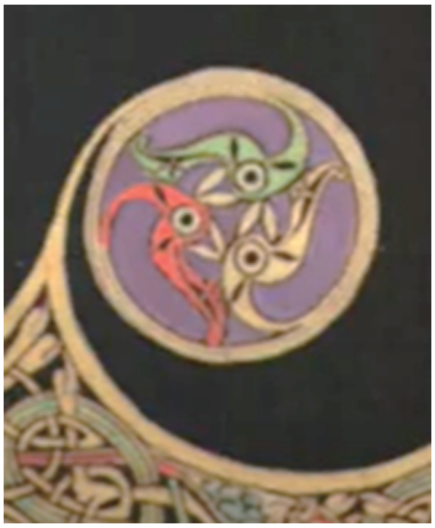
それでケルトキリスト教の雰囲気というのはどういうものか、ケルティックなものはどういう雰囲気かということですが、そもそもケルトの文化はどちらかというと感性を大事にしまして、五感ですね。目で見て、触れて、感じて、そういった五感を大事にする豊かな文化で、水とか大地、風、炎のような自然の物をすごく大事にするものでした。いわゆるアニミズム的なもので、そういう意味では日本においてはアイヌの方々の文化や精神性、スピリチュアリティと非常によく似ていると思われます。例えば、皆さん「千の風になって」という歌をご存じですか。ああいう雰囲気です。あるいはハリーポッターの世界です。これはまさにケルティックな雰囲気です。イギリスの人は妖精が大好きですけれども、そういった雰囲気です。これはやはり、ケルティックのバックグラウンドがあるからだと思われます。



ケルトキリスト教には 2 つのキーワードがあるといわれていまして、1 つは「ハーモニー、調和」ですね。そしてもう一つは「エターニティ、永遠」です。時間的には夜から朝へ、闇から光へ、あるいは絶望から希望へ、こういうような時間軸です。一方でベネディクト会のキリスト教の方は、もっとロジカルです。論理的であり、言語的であり合理的な非常に組織的なものです。そういう意味で感性を豊かに大事にするケルト的な要素と、非常に組織性、合理性、論理性を大切にするベネディクトの要素とが見事にミックスし、ハイブリット化しているのが聖公会の源流だと考えていただいて結構かと思います。
ケルトキリスト教を表示するシンボルが二つありまして、一つはケルト文様という文様ですね。今お見せしているのですが、非常に美しい文様ですが、これは「ケルズの書」といわれるもので、ルカによる福音書の挿絵で中表紙のものです。



ちょっと絵が細かくて見にくいかもしれませんが、唐草文様の様なものでしたり、魚のようなものが三つ並んでいたりします。これがいわゆるキリスト教の大事な教え、教義であるところの三位一体（トリニティ）です。「父と子と聖霊」といい、神とキリストと聖霊、この三者が一体という、三位一体論がありますが、それをケルト文様では魚が三匹連なっているというイメージで表しています。これも非常にケルト的な雰囲気です。こちらはいま大英図書館に所蔵されておりますが、「リンディスファーンの福音書」。これもケルトキリスト教の雰囲気を非常によく伝えている福音書で



す。挿絵の組み紐文様では、トリニティがはっきりしています。魚が３匹繋がっていますが、三位一体を示しており、大変素敵な文様です。これがケルトキリスト教の一つの特徴です。

もう一つのシンボルは、ケルト十字、ケルティッククロスです。ケルティッククロスは先ほど言いましたように、インターネットで検索しますと、若い人たちに大変人気のあるアクセサリーにもなっています。

今お見せしているケルト十字は『アングリカン・コミュニオン・ガイド』という、アングリカン・コミュニオンというのは世界の聖公会の事を意味しますが、世界の聖公会のガイドブックの中表紙に出てくるもので、そういう意味でもこのケルト十字というものは、非常に聖公会にとっては大事な、アイデンティティを意味するものです。それがケルトキリスト教のもう一つの重要なシンボルになっているわけです。ケルト十字は普通の十字架のようにタテとヨコの線があり、その真ん中に二重の輪が組み合わされているものです。この二重環の意味は様々な説がありますが、一つの説としては内側が太陽を意味していて、外側の輪が宇宙を意味しているという考え方がありますし、内側はハーモニー、調和ですね、調和性。外側の輪がエターニティ、永遠性を意味していると考えることが出来るとも言われています。これはまさにケルトキリスト教の特徴で、聖公会はケルト十字が大好きです。聖公会の教会はもちろんですが、お墓とか、施設、学校ですとか病院に行きますと、結構な確率でケルト十字を発見することが出来ますので、皆さんも世界各地にある聖公会の関係施設に行かれた際には、ケルト十字探しをしていただけると良いかもしれません。

十字架には様々あり、今お見せしているのは普通の縦、横ですね。それぞれの十字架には名前がついています。これは一番シンプルな形でローマ十字と呼ばれるものです。

さてこれは何でしょう。これはまさに皆様の一番大切な桃山学院の学院章、シンボルですね。このエックス、これは十字架です。皆さんご存じかと思いますが、聖アンデレ十字、アンデレクロスといいます。これもまた大事な聖アンデレというイエス様の弟子をシンボライズした大切な十字架の一つであり、これが皆さんの桃山学院のシンボルマークになっているという事です。これは実際に英国にあるケルト十字です。そのようなわけで、聖公会はケルト的なものとローマ的なものの両方を大事にしているという事です。

ベネディクトの伝統

もう一つのローマ的なもの、ベネディクトの伝統が、どうもたらされたかについてお話ししたいと思います。それは 597 年に遡ります。オーガスティンという人がローマから英国のカンタベリーに到着する年が 597 年です。この 597 年という年号は桃山学院に連なる皆さんはぜひとも暗記していただくと良いと思います。桃山学院のそれぞれの学校には創立年がありまして、ワレン先生が創立された年、直近では、桃山学院教育大学が 2018 年に創設されたと思います。それぞれも大事な創立年ですが、皆さんの学校、桃山学院各校はもっとルーツを昔に遡れるのです。その起点が 597 年という事です。ですので、この年号はぜひとも覚えておいていただければと思います。そのあたりの話をいたしますが、この 597 年に、なぜローマからオーガスティンが英国に行ったのかということです。

その当時、ローマがカトリックの中心地で、当時のローマ・カトリック教会の修道院はいくつかありましたが、その中でも最古の修道院でかつ一番力を持っていた修道院がベネディクト修道会です。当時、院長をしていたのがグレゴリウスという人です。

今お見せしている挿絵は、杖、牧杖と言います。牧師さん、主教さんが持つ杖と同じですね。それを持っている方がベネディクト修道院の院長であったグレゴリウスです。当時のローマ社会には奴隷制度があり、奴隷が売り買いされていたと、これはそれ自体が現代の価値観からするとまったく問題外といいますか、それ自体が問題なわけですが、そういう時代だったという事です。その奴隷制度があって、売り買いされていた奴隷たちはおおむね 10 代の少年たちが多かったのです。修道院の院長としての務めとしては、その奴隷たちを慰めて訪問する、慰問するという仕事がありました。

これはあるエピソードですが、グレゴリウス修道院長が、いつものようにローマの奴隷市場に奴隷たちを慰めるために行きました。すると、向こうの方に青い目で金髪の白い肌をしている少年たちがいるのをグレゴリウスが見つけたといいます。そして、グレゴリウスがお付きの人に「彼らはどこから来たのか」と尋ねたといいます。そうするとお付きの人が、「彼らはアングロから来た人たちだ」と答えたのです。アングロというのは現在の英国という意味ですが、そこでグレゴリウスがこう叫んだと、これは伝説ですが、「いや、彼らはアングロ（英国）ではなくて、アンゲリ（天使）だ」と、すなわち、「彼らは英国の人ではなくて、天使たちだ」。そのように思わず叫んだといわれています。そしてお付きの人に「天使たちを、アンゲリたちをこちらに呼んできなさい」と言って招いた。グレゴリウスはそれをきっかけにアンゲリたち、天使たちが住んでいる国、アングロの地、英国の地にきちんとしたキリスト教の、ベネディクトのキリスト教を伝えたいという思いになったと言われています。そして彼は英国の伝道計画を立て、実際にお金も貯めて、人も集めたと言われています。

今でこそローマからロンドンヒースロー空港まで、飛行機で、2時間ぐらいで行ってしまいますが、当時はアルプスを越え、最終的にはドーバー海峡を渡ってという大変な時間と労力とお金がかかったのです。しかし彼が資金を貯め、人も資材も用意して、いよいよ英国伝道に旅立とうとしたときにある出来事が起きてしまうわけです。

当時のローマ教皇が亡くなって、ローマ教皇の選挙が行われることになりました。そして新しいローマ教皇に選ばれたのがグレゴリウスでした。そして、のちにグレゴリウス1世という名のローマ教皇として伝説的な教皇となるわけです。

現代のローマ教皇は世界中を飛び回っておられ、今のフランシスコ教皇もそうですし、先々代のヨハネ・パウロ2世も、フライングポープと言われ、世界中を飛び回っておられます。けれども、当時の教皇はそんなことは許されなかったのです。常にローマに居なくてはならなかった。教皇に会うのは「謁見」といいますが、ローマに行って会うという事です。そういう理由で、グレゴリウスは英国伝道を諦めざるを得ないという事になってしまいました。

Saint Augustine Of Canterbur

聖オーガスティン

資金も人も用意したのにもったいないと思ったグレゴリウスは、後任の修道院院長でありましたオーガスティンにちょっとあなた英国伝道に行ってらっしゃいと指示をいたします。オーガスティンの方は、嫌で、嫌で仕方がなかったと言われています。なぜならば、アングロだのアンゲリだのと言ったのではないですし、何のモチベーションもないわけです。しかし、教皇の命令には逆らえない、絶対ですので、渋々英国に旅立ったと言われています。

オーガスティンはローマを旅立ち、アルプスを越え、皆さん英国の地図をちょっと思い浮かべていただけると思いますが、ドーバー海峡を越え、英国の東南の角っこあたりにたどり着きます。そこがケント地方というところで、その中の一番大きな町であったカン

タベリーに到着をしました。そしてそのカンタベリーに、早速ベネディクト修道院を建てます。
今お見せしているのが、その修道院の跡です。「オーガスティンの修道院」と言われていますが、今もカンタベリーにありまして、世界遺産になっています。ご覧頂ければわかりますが、廃墟となっています。なぜ廃墟になっているかというと、残念ながら、16世紀、ヘンリー8 世の時代に、解体され壊され、遺跡になっています。

字が小さくて見えにくいかもしれませんが、これがオーガスティンの最初のお墓です。そこに「the first Archbishop of Canterbury」 と書いてあります。「初代カンタベリー大主教」であるオーガスティンと。そして「597」と書いてあります。これが、初代カンタベリー大主教として、「着座」と言いますが、オーガスティンが主教の椅子に座った年になります。それが、597 年という事でここに記録があります。そういう経過で、彼が初代カンタベリー大主教になったと、知らされているわけです。

このカンタベリー大主教というのが、皆さんの桃山学院のルーツである聖公会、世界の聖公会の中心になります。ローマ・カトリック教会でいうところの「教皇」にあたる存在になります。ですので、カンタベリー大主教という人が聖公会にとっては一番重要な存在となるわけです。後程、写真を見せますが、現在は第 105 代目のカンタベリー大主教で、ジャスティン・ウェルビーという方です。105 代にわたってカンタベリー大主教が、ずっと続いているわけです。聖公会の発祥としては一応、公式的には 597 年、オーガスティンがカンタベリー大主教として着座した年となっているのです。というわけで、先程申し上げたとおり、皆さんの桃山学院のルーツのルーツは 597 年であると考えていただければと思います。それだけの古い歴史を持っている学校は多分他にありません。大阪にもたくさん学校があると思いますが、そこまで遡れる学校はあまりないと思います。是非皆さんそ

の事の意味を大事にしていただければと思っています。

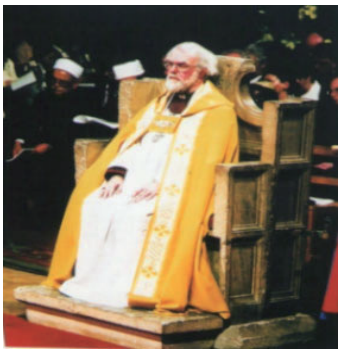
カンタベリー大聖堂の主教座

オーガスティンの修道院跡の横に、更にもう一つ修道院が作られまして、それは後に大聖堂に発展いたしますが、それがカンタベリー大聖堂、今お見せしているのが、夜のカンタベリー大聖堂です。ゲートから見た素敵な写真です。これももちろん世界遺産で、このカンタベリー大聖堂が現在、聖公会の、ローマ・カトリック教会でいうところのサンピエトロ大聖堂にあたる存在となっています。先程のオーガスティンが初代カンタベリー大主教で、このカンタベリー大主教がその中心だと言いましたが、聖堂としては世界中の聖公会の中心がこの大聖堂、総本山という言い方をしてもよいかもしれません。それがこのカンタベリー大聖堂です。これはカンタベリー大聖堂の内部の写真ですが、素敵な素晴らしい建築で、ノルマン様式ですとか、ゴシック様式ですとか、様々な重要な建築様式が詰まっている世界遺産です。中に入りますと、このゴージャスな建物に目を奪われるのですが、実はこのお見せした写真の中で何が一番大切だと思われるでしょうか。

実はですね、それはこの奥にあります小さな椅子です。大きくしますとこの写真です。これがカンタベリー大主教の椅子、「主教座」と言います。大聖堂は「主教座聖堂」といいまして、先程ご挨拶していただきました磯主教様も大阪教区の主教様で、川口基督教会が主教座聖堂です。そこには、大阪教区の主教座、主教の椅子があります。主教座聖堂というのは、主教の椅子を覆っている被いにすぎないのです。椅子が重要で、この椅子に権威があります。そしてこの椅子の権威がそこに座る存在にインストールされるという言い方をするのです。ですから、その椅子がとても大事なのです。

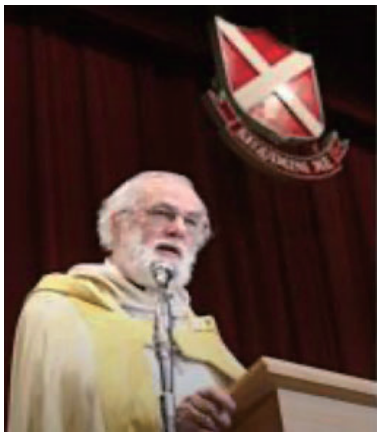
皆さんは「聖公会の」大学とか「聖公会の」学校とかって言いますよね。英語ならアングリカン（Anglican）の何々と言いますけれど、「聖公会の」というのはどういう意味かというと、いろんな言い方がありますが、一つの捉え方として、今お見せしている、はるばる遥か彼方にある英国のカンタベリー大聖堂にある主教座と、見えないリンクを張っているのが「聖公会の」という意味です。ですから、桃山学院に連なる皆さんも、実は聖公会の学校のメンバーということでいいますと、皆さんも遥か英国のカンタベリーのこの椅子とリンクを張って繋がっています。「カトリックの」という場合も同じです。カトリックの場合は、バチカンにありますサンピエトロ大聖堂に教皇座という椅子があります。教皇座とリンクを張っているので「ローマ・

カトリックの」ということになります。



この写真は、先代の第 104 代カンタベリー大主教です。第 104 代カンタベリー大主教が着座した就任式の模様です。椅子に座られた瞬間にこの椅子、カンタベリー大主教座の権威が、ローワン・ウィリアムズという方にインストールされて、カンタベリー大主教とされるというわけです。そういう意味であるということを覚えていただければと思います。

2009 年に、日本聖公会は、宣教 150 周年を迎えました。先程言いましたように、1859 年にチャニング・ウィリアムズがアメリカから上海を経て長崎に辿り着いた年です。これが出発点なので、その 150 年後だった 2009 年に、日本聖公会の創立 150 周年記念の大礼拝が行われ、当時カンタベリー大主教であった、第 104 代カンタベリー大主教を日本にお招きしました。そして私の属する立教大学も創立 135 周年でしたので、カンタベリー大主教をお招きして、名誉博士号を授与して説教をしていただきました。ちょうどその時に、桃山学院大学も創立 50 周年を迎えられて、桃山学院大学を訪問していただきました。



この写真はまさにその時、桃山学院大学で、第 104 代カンタベリー大主教、ローワン・ウィリアムズ大主教がメッセージをなさっている写真です。ちょうどカンタベリー大主教の真上に、先程言いました聖アンデレの十字、アンデレクロスの入った桃山学院の学院章が見事に輝いています。そういう繋がりだということです。それが皆さんの歴史の原点にあるということをお覚えください。

現在、第 105 代カンタベリー大主教は、ジャスティン・ウェルビー大主教です。これはウェルビー大主教の着座の模様で、カンタベリー大聖堂で行われました。

英国教会の成立

英国の歴史に戻りますけれども、英国の宗教改革によってローマ・カトリック教会から聖公会が正式に独立するのが 16 世紀です。それがヘンリー8 世の時代で、ヘンリー8 世は国王ですが、同時に信徒でした。そののちのエドワード 6 世やエリザベス 1 世(肖像画)も信徒です。英国の宗教改革の意味は何かというと、信徒が、ローマ教皇の権威よりも上にくるということで、「国王至上法」

という法律が英国の議会で 1534 年に可決されます。皆さんご存知のルターやカルヴァンの宗教改革と同じように、聖公会は信徒中心の宗教改革であると言えるわけです。
英国の聖公会は英国国教会とか、英語で Church of England と言います。おそらく皆さん高校の教科書などでは、「イギリス国教会」というのが一番ポピュラーなのかなと思いますが、すべて同じ聖公会のことです。

英国聖公会の総会

この英国の聖公会の総会では必ずオープニングメッセージを、国王が行います。なぜかというと聖公会の信徒の代表は国王だからです。今は、誰ですか。エリザベス女王ですね。エリザベス 2 世で、かつ英国聖公会の信徒の代表でもあるのです。これが英国聖公会の総会の写真ですが、英国聖公会の総会が最初に行われたのは、年代的にいつ頃だと思われますでしょうか。16 世紀でしょうか。17 世紀でしょうか。そうではなくて、1970 年が第 1 回の英国聖公会の総会の年でした。えっ？と思われるかもしれません。それまでは総会をしていなかったのかというと、そうではなくて、実は英国の国会、英国の議会そのものが英国国教会、英国聖公会の信徒総会でもありました。
国会議員は信徒の代表でした。パリッシュ（教会区）から選出される信徒代議員ですね。それが国会議員でした。ですので、祈祷書とか、様々な教会の事柄は、今でも法律的には全て国会の決議によることになっています。

今お見せしているのはつい数日前の写真です。
1952 年に王位を継承されたエリザベス女王は、今年 2 月に英国君主としては史上初となります即位 70 周年を迎え、つい先週 6 月 2 日から 5 日にかけて記念行事が行われたので、皆さんもテレビでお見かけになったかもしれません。「プラチナ・ジュビリー」と言いますが、お元気でございます。私もランベス会議という会議で 2 度ほど女王様とお会いをいたしました。とてもチャーミングな方です。

この方は、ダイアナさんですね。ダイアナ妃。皆さん覚えていらっしゃいますか。ダイアナさんもウェールズ聖公会、プリンセス・オブ・ウェールズという聖公会の信徒の代表という位置づけを与えられているわけです。
以上、歴史のお話をいたしました。

聖公会の学校に共通する建学の精神

残り 20 分ばかりですので、皆さんの桃山学院の建学の精神を、ひいては「聖公会の学校に共通する建学の精神について」お話をさせていただき

たいと思います。

立教もそうですし、桃山学院もそうですし、プール学院、そして神戸松蔭女子学院、平安女学院、東京ですと立教女学院、香蘭女学校、聖路加国際大学など、全てではありませんが、たくさんあります。これら聖公会関係学校に共通する建学の精神があります。

それは「真理を探究すること」です。

①普遍的な真理を自由、かつ謙虚に探究すること。

②神から与えられた才能、資質を伸ばし、科学的知識を培い、技能を磨くこと。

③伸びやかな発想で自分を表現し、知性を広げ、望みを高くすること。

④自分の殻を破り、これまでに身につけ、無意識のうちに自分を閉じ込めてきた殻を破って、自分を解放すること。

このあたりの４点に集約されると思います。

そして皆さんの桃山学院の学院章にも刻まれています「セクイミニメ、我に従え」という言葉がありますが、アンデレがイエスに従ったように「自由と愛の精神」をもって生きることや、パウロが言っている「あなたがたは自由を得る為に召し出されたのです」というガラテヤの信徒への手紙など、この辺りを桃山学院さんはとても大切にされています。「自由」とは、一人ひとりの人格と主体性を尊重し、「愛」とは互いに仕えあいながら他者と共に生きること、この「自由と愛の精神」です。まさにこれが桃山学院の精神であり、かつ聖公会の学校に共通するものであるということです。そして、「この世界・社会・隣人のために奉仕をすること」

①神を畏れつつ、世界、社会、隣人、すべての「いのち」のために、愛をもって仕え、共に生きること。

②神さまの前では、一人ひとりの人間が等しい意味と価値を持ち、神から愛されるかけがえのない存在であり、尊重されなければならないことを理解することです。この辺りが、私たちに共通するのであります。

ＶＩＡ ＭＥＤＩＡ

聖公会の考え方、そしてまた、聖公会で何を大切にしているのかということをお話しておきたいと思いますが、「ＶＩＡ ＭＥＤＩＡ」という言い方があります。これは、聖公会の神学、考え方を見事に表現しているもので、「ＶＩＡ」というのは「道」で、「ＭＥＤＩＡ」というのは、「中」ですので、直訳いたしますと、「中道」となります。けれども、実際には単なる「中道」という意味ではなく、本来的な意味は、私たちは、道の真ん中を歩き続ける旅人である、真理を求める旅人である、ということです。「聖書・伝統・理性を道しるべにしながら、真理を求めて旅をし続ける旅人である。絶えず歩み続ける旅人だ」ということです。

それからもう一つあります。「あらゆる絶対主義をとらない」というのが、聖公会に共通する考え、大事にしている考え方です。要するに道の片側に立ち止まって「私たちは真理を知っています」

とは断言しません。よく聖公会は、はっきり言わない教会だとか、曖昧だとか言われますが、確かに極端に言いますと、聖公会はファイナルアンサーを出さない教会だとも言えます。なぜならば、ファイナルアンサーは神さまのみがご存知だからです。私たちは常に真理を求めて旅をし続ける、解釈し続けるのでありますから、簡単に「答えはこれです」とは言わないのです。聖書や伝統や理性を大事にしながら、旅をし続けることを聖公会は大切にしてまいりました。これこそが、聖公会の「ＶＩＡ ＭＥＤＩＡ」の精神ということです。これは桃山学院の皆さんにもまさしく共通する基盤となっているのだと思います。

理性と伝統

その中でも特徴的なのは、理性と伝統を聖公会は大切にしていることですので、その点をお話したいと思います。「理性」はドイツ語で「フェルヌンフト（Vernunft）」といいますが、それは英語の「理性」である「リーズン（reason）」とは少しニュアンスが違うのです。ドイツ語の場合の「フェルヌンフト」は、ちょっと「個人的な」「私の」合理的な考え方と言う意味が強いのに対しまして、「リーズン」としての理性は、むしろ「共同体の経験」「私たちの経験」「私たちが共に経験すること」といった意味合いが強く表れており、英国発祥の聖公会は「リーズン」としての「理性」理解を持っています。英国で王立協会などに代表されるような形で、自然科学が発展した理由は、まさにこうした「理性」理解を大切にした聖公会のバックグラウンドがあったことは間違いないです。

これは、聖公会だけではないのですが、キリスト教世界には、「神さまは２つの書物を書いた」という考え方がありました。神が書いた第一の書物は、もちろん聖書です。そして、神が書いた第二の書物は、「自然・宇宙・人体」です。自然や宇宙や人体も神様が書いたテキストだという考え方、これはとても皆さんわかりにくいかもしれませんが、そういう風に考えていたわけです。ですので、教会や神学者の仕事は何かというと、神が書いた書物を読み解いて、そこから真理を明らかにすることなのです。

第一の書物の聖書は何語で書かれていたかというと、旧約聖書はヘブライ語、そして新約聖書はギリシャ語で、当時、標準的な聖書はラテン語に翻訳されていました。このヘブライ・ギリシャ・ラテン語で書かれた聖書のテキストを読み込んで、神が書いた第一のテキストの意味を探って、そこからさまざまな意味を引き出すことが教会の務めであり、神学者の務めでした。

一方で、神が書いた第二の書物、「自然・宇宙・人体」、これもテキストなので、言語で書かれているわけですが、何語で書かれていたと思いますでしょうか。それは「数学」です。数学というのが、いわゆる言語として考えられていて、数学という言語を用いて、神は自然・宇宙・私たち人間の体を書いた。それを数学という言語を使って、「自然・宇宙や人体」というテキストを読み解く作業、それを通して、神のクリエーション（creation）、すなわち創造、神の神秘、

神の存在を証明し、神の存在を賛美する働き、これも神学者の働きですが、それが特化した職業がいわゆる科学者です。科学者はその意味で神学者であったということです。

リベラルアーツ

これはいわゆる「リベラルアーツ」と言われる自由七科です。

この上の３つ「文法・修辞法・論理学」というのが主に神が書いたテキストであるところの聖書を読み解くための技法であって、この下の４つ「算術・幾何・音楽・天文学」は神が書いた第二のテキストであるところの「自然・宇宙・人体」を読み解くための技法です。しかしながら学問をする人は、必ずこの７科目をマスターしなければ専門に進めなかったということです。下の４科は今でいう「自然科学」、上の３科は「人文学」や、後の「社会科学」に繋がっていくという事です。これらを「リベラルアーツ」と言い、皆さんもそれぞれの大学でリベラルアーツをなさっているわけです。

- 自由七科（神学基礎科目）
  - 三科：言語科目（trivium）
    - ①文法（grammatica）
    - ②修辞法(rhetorica)
    - ③論理学（logica）
  - 四科：第二言語科目（quadrivium)(数学)
    - ①算術（arithmetica）
    - ②幾何（geometrica）
    - ③音楽（musica,harmonia）
    - ④天文学(astronomia)

科学者？ 神学者？

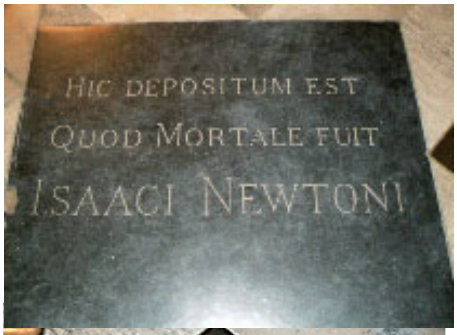
ですので、ここに書いてあるコペルニクス、ガリレオ・ガリレイ、ケプラー、ニュートン、ロバート・ボイル、ダーウィン、彼らは皆、自己理解は「神学者」であるということです。理性というのはそういうことで、聖公会の中ではとりわけ実験や経験に近いものです。先程言いましたように自然科学が英国で発展した理由、それは間違いなく聖公会の神学がバックグラウンドにあったと言えるわけです。

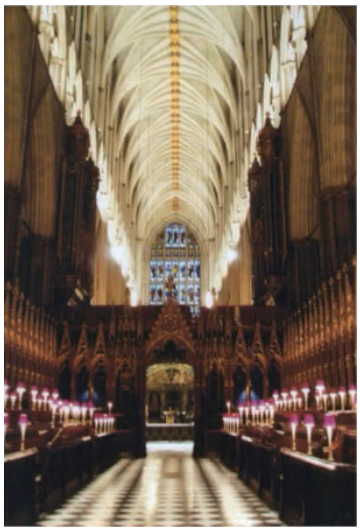
例えば、「アイザック・ニュートン」を皆さんご存知ですか。万有引力の法則で有名ですが、彼も聖公会の神学者です。彼の自己理解もそうです。彼のお墓は、ロンドンの聖公会のロイヤルチャペル、王立チャペルでありますウェストミンスターアビー寺院にありますけれども、彼はウェストミンスターでは、理神論という立場の神学者として埋葬されています。聖公会の神学者として埋葬されております。

ちょっとお見せしますと、ウェストミンスターの内部ですけれども、これはニュートンのお墓の碑ですね。

素敵な宇宙の地球儀のモニュメントがあります。これはチャールズ・ロバート・ダーウィン、種の起源で有名なダーウィンもケンブリッジの聖公会の神学生でした。

「ファラデーの法則の」マイケル・ファラデーもウェストミンスターに葬られている聖公会の科学者です。





これは「メサイア」などの音楽で有名なヘンデルのお墓です。そういった方々がウェストミンスターに葬られています。

リチャード・フッカーという神学者がいまして、16 世紀の神学者ですが、彼が大変大事にしたのはこういう事です。彼は、トラディション（tradition）としての「伝統」と、トラディショナリズム（traditionalism）としての「伝統主義」を明確に分けて考えました。

「伝統」というのはライフライン（lifeline）です。つまり生命線です。「伝統主義」というのはデッドハンド（dead hand）、死せる手枷足枷、過去の束縛みたいなことです。

聖公会はとても「リベラル」です。リベラルというのはどういう意味かというと、頑な伝統主義や権威主義を排除する姿勢です。

ですから、聖公会の大学、学校にとって大切なことは、その生命線＝ライフライン、自分の学校にとってのライフラインは何か。そこに属している皆さんにとって、私にとってのライフラインは何なのか。この社会にとってライフラインは何になるのかということです。それを考えることがすなわち「伝統」を考えることであって、また私たちはその時に、「伝統主義」に陥っていないかというこ

とを考えなければならないのです。

大学の使命

大学の起源は、遡りますと、12 世紀、13 世紀のオックスフォード大学・パリ大学・ケンブリッジ大学ですが、その当時ありました学部は、主に 3 学部でした。全ての学部の共通目的は聖職者を育てることでした。神学部がまず建てられて、学生は神学部を出ると「司祭」になります。司祭は人々の精神的な痛み、霊的な痛みに関わります。もう一つあった学部は医学部です。医学部を出れば「医者」になって、人々の身体的・肉体的な痛みに寄り添うのです。三つ目の学部は法学部です。法学部を出ると「法律家」になって、社会の痛み、社会的な痛みに寄り添うのです。

これらの痛みに寄り添う職業、これを英語で「vocation」とか「calling」と言いますが、これは聖職者に召されるという意味もあります。「召命」と言いますが、まさに「聖職者」です。これらの人々を生み育てる場所が大学であったということです。それが聖公会の考える学校のルーツ、とりわけ大学のルーツです。ですから桃山学院大学や桃山学院教育大学の建学の大元は、まさにここにあるのです。様々な痛み、すなわち精神的痛み、霊的痛み、肉体的痛み、社会的痛みに寄り添う人々を生み育てるために聖公会は学校を創立したということをお話しておきたいと思います。
時間を超え、空間を超えて、真理を探究することが出来る場所が、聖公会の大学であるということです。アメリカ聖公会を代表するフランク・グリズウォルド総裁主教は、かつて立教に来ていただいた時にこういう話をしてくださいました。

「聖公会の大学とは真理を味わう場であり、学生、教職員とは真理を探究する旅人だ。
大学は学生の ”character” を形成する場だ。”character” とは単に、性格とか人格ということではなくて、自らの弱さや不確かさを自覚する「変化を恐れない精神」を意味する。だからこそ聖公会の大学は真理を探究するために常に開かれていなければならない。閉じられてはならない。自らが試される、自らが否定されることを恐れてはならない。ことにキリスト教を規範とする聖公会の大学はそのような意味で<危険な場>でなければならないのだ。」と言われました。まさしく<危険な場>となること。すなわち、批判すること批判されることを恐れないで、真理とは何かにこだわり続けること。

自己の存在を知り、他者の存在に気づき、人間を学び、世界を読み解くこと。いわゆる「常識」や「定説」を疑うこと。「権威」を問い、相対化させること。これがまさに聖公会の大学、学校に共通する大事なミッションだということです。このことを是非、桃山学院の皆様にも共有していただければと願っています。ですから、重要な点は、自らオリジナルの原書・原文、第一資料にあたり、読み、確かめることです。そのためには、必要な言語を習得する必要があります。日本にないものであれば、実際に海外まで出かけていき、自分の目で確かめなければならない。その場合には海外にまで行かなければならないのです。

その様にして聖公会の学生には”character”を創りあげていって欲しいということです。

時間になりましたので、最後にしたいと思いますが、この写真は先程申し上げましたウェストミンスターで、ディーンと言いますが、首席司祭、責任者のジョン・ホール先生と、立教大学の当時の総長と立教小学校、中学・高等学校長と私とで行った時、私が撮った写真です。

ウェストミンスターは、聖公会の教会なので、桃山学院の皆さんも、ロンドンに行ったときには是非とも遊びにいってください。

しかも礼拝がありますから、夜の閉館後、いわゆる観光客が帰った後に、夕の礼拝がありますので、そこにぜひ出席し、「私は Anglican university の student とか、Anglican high school の student だ」と言っていただければ、大歓迎してくれますので、是非行ってみてください。そうすればこのようなウェストミンスターの雰囲気を肌で知る事ができると思います。先程のジョン・ホール先生はウェストミンスターのディーンの務めとしてロイヤルウェディング（英国王室の聖婚式）の司式などもされました。

そして、桃山学院

さて、ずっとお話をしてきましたが、この方は、ワレン司祭です。桃山学院のルーツは明治維新の頃に来日された宣教師たち、とりわけワレン先生が出発です。ワレン先生は、後に 1899 年に 6 月 8 日、伝道旅行の途中広島県福山で急逝され、58 歳のご生涯だったということです。

大阪の川口外国人居留地での伝道活動は順調に進み、ワレン先生は教育の重要性に目を向けられ、キリスト教信仰に基づく近代的な教育を目指されました。1884 年に居留地内に先程申し上げました三一小学校を作られました。それが桃山の起源の一つだろうと思います。

1890 年には三一小学校と三一神学校を繋ぐ高等英学校を設立されます。これは今の天王寺区桃谷にあったと思われます。1895 年に「桃山学院」と改称されました。当時はその界隈が桃の名所として親しまれていたので、桃山と言われたと承っています。

1902 年には、大阪で最初の私立中学校として、桃山中学校が開校されて、1912 年には現在の阿倍野区昭和町のキャンパスに移転をされました。先程言いましたように、聖公会は英国の王室と非

常に繋がりが密接で、1922 年に英国の皇太子ウィンザー公が大阪港に入港された折には、桃山中学校の生徒たちがガイド役を務めたと記録があります。それは当然そういうことになるわけです。まさに桃山のルーツですね。

そして、戦争を経て、1947 年に新制中学、1948 年に新制高校が発足し、1949 年に戦災で失われた桃山学院の待望の校舎が再建されました。そして、桃山学院中学校、桃山学院高等学校として出発されました。1959 年に、聖公会が日本に宣教して 100 年、イコール、プロテスタント 100 年を記念して 1959 年に桃山学院大学が開学されました。その時に、準国賓として来日された当時の英国のカンタベリー大主教、フィッシャー大主教が臨席されたということです。これもすばらしいですね。カンタベリー大主教が臨席して開設された大学は世界中でも多くはありません。非常に重要な歴史だと思います。

そして 2018 年には、桃山学院教育大学が誕生して、桃山学院さんは四つの学校を擁するようになりました。まさに「セクイミニメ」「我に従え」という、皆様の学院の建学の理念が今日お話したようなルーツに繋がっているということです。

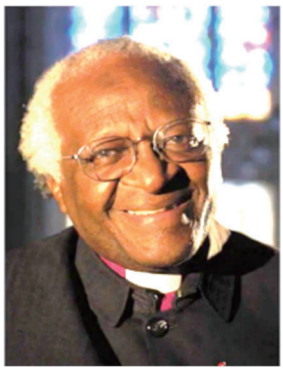
こちらは桃山学院大学の写真です。

こちらは桃山学院中学校、高等学校と大学のビジネスデザイン学部です。新しい学部もこちらに創られましたし、まさに今お見せしているのが、ここ桃山学院教育大学の写真です。皆さんの学校は、165 ヵ国 8,500 万人ものグローバルネットワークとしての時空を超えた Anglican　Communion、世界聖公会に繋がっているということです。

そういう学校で皆さん学んでいらっしゃるということを是非とも誇りに思っていただきたいと思います。

これがカンタベリー大聖堂の床に彫られている「コンパスローズ」というもので、これは世界の聖公会共通のシンボルマークですので、皆さんのマークでもあります。このデザインの意味は羅針盤です。

最後に、この写真の方はデズモンド・ツツ大主教です。アパルトヘイト撤廃に尽力されてノーベル平和賞を与えられた南アフリカの大主教です。この方も大切な私たちにとって記憶すべき聖公会の先達のお一人で、皆さんと繋がっているということです。この世界、この社会の片隅で、様々な困難や悲しみ、孤独の中で声を出すことができないでいる者や、かすかな声で癒しと救いを求めている人々の存在を聴き取ることが出来る人間を育て上げること。これが、ツツ大主教が望まれたことです。これはまさしく私たちに共通するミッション（使命）なのです。まさにこのようなミッション・伝統をもっているのが、私たち聖公会の大学、学校であり、桃山学院それぞれの学校であるということです。ちょうどお時間となりました。ご清聴ありがとうございました。以上といたします。



閉会の挨拶

小餅谷 哲男 桃山学院教育大学　キリスト教センター長

西原先生、ありがとうございました。

日本に聖公会が伝わった歴史、それに真理を求めて道の真ん中を歩く旅人である、そのようなお話、桃山学院と聖公会の繋がりを知ることができたお話でした。

それでは、これをもちまして、桃山学院キリスト教講演会を終了いたします。最後までご視聴いただきありがとうございました。